

誹諧手引種

坤

中村俊定文庫

文庫 18

743

2





誹諧手引種下

一陽井素外著



発自小服附の事先著流諧根原某のらるるをいひて  
昔連歌の小長形となし他のよきかけをいひて  
三十一文字となし也其まゝ調の歌首とすは上座  
向小をも中仕向まといひ他人の歌となる事録草よ  
見たり見發向とるを也ハ章をたき次題を出せし  
等しき其後申むしと成るハ五七五其意いひて  
るハ發向とるを也一着は又也を調のたふ

後句あきいれ句とやあけしと云々連歌甚致は某小  
片句登句とある部をたておきしるもの戸初字の人  
登句小腰と附夫とてはしむい侍て千久百員と云  
連歌と云ふものあるは連歌一首の上下と云ふ  
よしとの事也但し神代よりある事ながら連歌と云ふ  
金葉和歌集より治るの事ながら金葉五十句百句と  
日振し等しく八根原集と見ゆ

歌之附方句之業一方

歌の附方若くはとて歌の下の句ありと登句の云はれ  
かきし其作者の尋ねごとくよく解しと歌く連歌の  
事也とて連歌と云ふは又女道の法ありと相對附は  
附違附公附比留いふ也此の体も昔事ながら今共  
繁疎句ならん公附を添付と云ふは公附は登句は  
公附の二句からめ附方也其場他の人又附作は  
添て附相對は登句小結い物小對とて附違ひ附は  
黒白と遠いものや句の附やう小業はなるは比留と登句の  
附高小結いものと初まらるる附又初まらるる仲まらるる不定なる

發句小腕下て女時々の定するやふ附の也又云腕ハ名田  
とて物の名を又下の動する文字を留也後句たふ  
やと又動く仮名又てまはぬもやめまはぬまはぬ  
くまはぬ尚流通俗志小後て發句小腕なる切字を入  
振とハ文字より留中て留の外とせぬハ中ハハハハハ  
極めハともハ道知信の人ハ我見故実也又昔より切字の人  
はかハ重るとえふ小振るとまは留中文字留或ハハハ  
まはり仮名の外ハ留ハ稀ハ人ハも稀ハ事ハハハ

脇く五體

水底乃影や大地乃まはももも

整一  
独吟

相對

鹿の角やととと山三

發句大地の舌小下々をうけて也水底小ハ大地

舌小麻乃角と相對也

雀乃巢をハ松小かく作かさり葉一友仙

全

葦の屋小竹さる上齒原の系

季吟

登月朧もあつたえさる通を地をたふらるる宿の草  
比しあさの紫と亀乃屋ふまへ宿を相対也  
少くも自ら梅や自ら乃り少くもあせ

お添

独吟

真平主八見えぬ来世山里

登月ハ梅と見ふ宿へ入のあふ甘花の白く自ら少  
えあふ挨拶とまゝうかへし地朧ハ山家乃幸か戸  
さへもせてあふのあひし是は其宿をたふり也  
市中ハもれく自らいやなり月

三

凡兆

全

らりし〜〜〜はき

桃香

登月市中の夏ハ梅と自ら暑き花は秋ハ其の小  
きて独りし見をまゝを添へ附也

薬種屋も心〜〜〜

梅菊  
独吟

遠附

油〜ぬまもまめは夏乃夜  
登月ハ杜鰲の毒のやくん打音のがま〜〜〜  
心〜〜〜

不夜一人の杜きやせんや  
其まの志やうらむ物ほ  
柳さへ自由なまらぬ  
香室

夏日を陰に舟乃ち  
蒼狐

暑きを道むむを根  
式と水氣のまじきと  
一面小楫とふ  
仙化

公附

月一ろろえそてふ  
其角

六里乃熟とこのま  
涼帝

やれきて残るうら  
秋瓜

其詞小せのなる  
其公附

あまのくしゆくもとて更におもはる月

希因

比叟

夜も暖氣乃満る川に比

凉儀

登月ハ孫勝る水面の懸流子も定らざる也  
独其時能を沐生の比とて満の泪カある也

あまの似て我より治乃ほる所は那

蒼狐

全

扇のせも香も着きあら

登月ハ治の美に我世もあつて是も弱くくは花

五

遠くハあまの地ちらんれ向中言外ハ夏暑き餘情

あまのは彼扇のせも香も着きあら

あまの向附方并向り業一方

あまの事連流の書もあまの附方ハ長き業に  
あまの事とてあまの公得あまの事ハはあまの事  
あまの事とてあまの事ハはあまの事ハはあまの事  
あまの事とてあまの事ハはあまの事ハはあまの事  
あまの事とてあまの事ハはあまの事ハはあまの事  
あまの事とてあまの事ハはあまの事ハはあまの事  
あまの事とてあまの事ハはあまの事ハはあまの事  
あまの事とてあまの事ハはあまの事ハはあまの事

さるも俵用のこぼれまふ並次登向よりかかる時ハ秋セは格  
から好ら訓條にいたまふれをまらくとまき  
登向股もゆくまらる時ハ力カとて仕込向の長  
まきハ本小まきくつあふ登向一向の隣の事也毎箇ハおふ  
て留又出留と常もまきもてら後各折合付を又格子母  
のまきハ一箇(一箇)留よとまきハ一箇ハ懸ひのておはまき  
まきハ併心を用ひまきハまきハ一箇にて一箇よまきハなら  
さるのえゆるれまきハ一箇の仮名して留又文字よまきハ  
まきハ作例あまきハはま初登向のまきハ種ハまきハおて書はる

大

山に登りてまきのまきハ一箇ハ

て留 二て留 三て留

あつ 二つ 三つ

二番手取も早まきハ結ふ出まき 本末

登向股ハおふはまきハ早苗乃まきハ方いつら  
早く六月より農業マキまきハまきハ暑く  
はくから咲かまきハ沙陸乃彼岸のまき 支考  
かまきハ中おふまきハも晩待

独吟



湖乃水助く〜と畔あぢく

登白ハ空ノ乃墨小儼小海陸たむ詞をうけそし服を

係者まそ〜き世の壺乃あの中小々も昔乃陸ひの

申しあやけ六助〜る湖乃の霽々其縁通入

横〜の田の畔逢を是妻乃農事あはぬ漁

紅梅や〜くまも世の次おのりうら 乾什

疎〜し〜徳人〜ときはらた 舊室

耐勝ふ〜たも松乃登けあ〜 局菴

登白ハ稻荷の山乃も〜ち葉の本歌をた〜たあ

か〜し徳詞をう〜く〜人〜の〜あ〜松乃歌あ  
ま〜し〜家海附し〜し〜六廿人乃登け〜附く勝の  
細〜らぬも松の事あを

ほちる外日本け〜ふも松乃ゆき 蒼瓶

月ハあき〜と市中乃陸 宝馬

首逢〜る〜の壺の果や〜と 二世 沾原

登白ハは〜乃ま中ふ〜ら海文ハ佳味も稀なるを  
服ハ障〜たるも〜月ハあけ〜陸のあ〜らぬ市中  
お〜し〜海附〜る〜松乃の別限〜も昔〜らぬ名残の

孟果 ぬきもや但はで果やらんて

に苗

伸 ぬきもをきりけりけり

梅翁

独吟

本條 枝くらりかきとく雨雨小

発句 腕はねはらきとく雨の大程小降や

久小 乃枝々きとく腕遠附をきとく伸小降や

奇ら 是し也

ふらふら一日吹てよふけり

團友

鳥とまじりけり

し由

波うけてかづれとる乃うはし

ま考

発句 理をなむてぬきも風はら

はら 舟の事とまはす時の小来日和るの波を時くし

ほし 但まのに苗上へみらぬやふふ苗ま

もはし苗 八なり

首 波やと朝うけりけり

尹督

着 葉あらりふとくは

来示

第 目の浪ふとくは

蒼狐

発句 八首 波の山杜終ぬきとくは

より大峰山より出づるかけぬけを  
いふかけぬけを世に胎の坊本時候時々の原舟を  
はらふはききと厚もはくと胡はめの俵を

海棠や入相の詩も持つははけ  
和左簾

なまぐさのむらさき別荘の妻  
佐保丸

出帆風屏屏ふむく雲ははし  
舊室

榮向の詩の妻ふ絶を眠りてさよや独り妻の夕雲の  
奉次をいふつけとあはさるるふふの在り越るや  
旅の雲の物と依りて六絶と水楼と又せしむ

らん昌

舟人のうらふさや雲乃いぬ  
専吟

柳ふささく川を飛蟬  
其角

百草の層や花跡ふかゝらん  
信徳

登り夏雲奇峰の虫暑火舟人裸小をさすもけ  
まじや独りもさす湯と依りて六絶をふ絶ひ絶  
跡さけり草の妻ふく梅はさすほららん茶を也

寒梅や将乃さくらた不念よみ  
佳風

山をくくろは旅路はくらし  
扇菴

曲け菴の漁村も我代傳るゝあらむ 才磨

祭自八月小き梅の先うけふれてかの服乃まよも  
思ひ寄るに腕女勢の尾田の中小悪まきさる働きと  
見ふ附しやと曲け菴伏菴の漁村も山とほしあふ  
風を防きていく代ふらあらんといはれ也

脇才とくると表八句業一か并季授といふ事

脇才と附方各ふまは作例を以てたまふと又云発句哉  
笛の時ふりて田とせ所係けし通をねまて不苦といふ

十

女名にむつじとせぬ方可ならんは又発句小賄物ある  
時にやまのまを三揃はみ何事も初六席上の師家又  
可者小うかしてまは也 田の八句作も田もゆき  
これと極めていんぬと田こしり小八流るる 九句目ハ  
かまらぬとをん合せてまは但才とらん田もはし田の時  
てのよりといふは是亦たつとるまもはし 十句目七句目  
熱体表八句八連祝とも表風俗とて句作よ公得るを物や  
一ツ宛小いで句を控くて小はらうと田し登り植物山田田  
生類降物食類人倫人事居所都會村里朝旅宿駅月水辺





縁ありきを以て付四ノ人お小ありきと事小並て附る句  
お小と嫌ふ之又西成附とて附る是も之縁の以て好道  
由附ハハ付方もあるに云連歌ハ法付物先定なる  
おとせよたはらふは附と以てお越と物なる事を信て又  
禪坐の句もあるに詠語ハ附廣き事あるお小及て次  
お越と附て付方ありし法りしおかぶて寿作あり  
は向もいも此伏法句は松小とて(法)付ハ未練の  
事し

親合々附方

家ハ佳くまこと破まじやと法に

さうふりも色並ふ小糸とらうけて 宗鑑

家をと造る小蜂の巣うける付破まじやと  
をを付とわらうて親く附ん

五日の雨ふくくもあきせぬの

つ田乃早苗なるまのきりぬり 梅翁

さうふりも色並ふ小糸とらうけて  
他出せぬあき世に友句とも安らふ附細やう也

味向く附方

味向の附方乃事ハ亦小述一通也次亦事と西道皆  
味向在字小引向と云々其附合を以て考後又今カ  
味向乃附合と云々是を云風体と云々之云何々也思  
此者之使甚門甚風極云唱之混まらぬ思其妙又宗祇法  
朝小らそ云風体と云向の之行亦云々時より一統  
又貞徳より御潜乃連歌と云々これ梅之其外皆連歌所  
亦まハ今連歌と云人の賞せと味向も有又え祿より乃  
附合と連歌小引云々又時ハ亦云々云々由多ク

四小引と名附一分

連歌乃之片兩小如也

傘のさし一はひあるさかも也 宗鑑

貞徳淀川小は向の腕云南附用附之雨小傘も  
舟傘らひと但やははは附と云々云々唱之ら  
小やさけと云向字は晴は其出さとの歌を宗  
載と云田原よてもは傘二句云又傘と云々  
連歌と付さやあとい合の取口云々は是も  
一



取寄りの消方

おいであまじし〜

姉乃子懐せし〜し小女也

宗鑑

は出を甥でしと云ふなり姉は子皆女也姉の  
有男もてしと云ふしと云ふ也

親乃〜と云ふと云ふなり

若竹もやせけて行ふなりと云ふ

季吟

親の歌と親竹の思き行ハホカカと云ふ利  
し〜なり若竹ハおらうと云ふハばやけハ親の

上

月正〜〜〜と云ふと云ふ〜各人の思き〜  
名如の吟もあ〜と云ふ

附合四道之附方ハ品七名ハ体之事

運歌の附合ハ四道乃法を法徒又隨離又放逆之法有  
山ならハ流木と云ふ鳥といふやふ法で附徒ハおもふ  
暑冬ふ寒林又人ならハ冬之事を隠して射馳ハおも  
ならハ松家ならハ仲と云ふ物にて附やふ標逆ハおも  
墨ならハ風月なら雨と云ふ歌と云ふ物を附合す

附く但まふり六夫ふれを付すと六非ははまを以て何  
何なる附き也一巻、右四の附方を以て信く句のうら  
つと體し申く也又意本守武小八品は附を寓言風情  
對てなりむむは内アとては信何小何なるうらをこのう  
風を以て言外梅雪の雪采右八品は相當の句と守武  
独吟子句の内を中と撰くうらと形と題也集を編ま支極  
つ支考七名八体、うけ附方とやして其使ふお七名と  
右心起情向附、今秋述句をま拍子八体八共、其場  
時分時常時宜天相觀相面影也は外は風ふきて會

まて、何まてとえ、八の四道なりか、くは是いつれ、附合の  
階梯あり、夫ふなりつて、凝り附、八理在、小落て、益、い、公を  
是却、う、凡、信を、夫、う、や、四道の附、と、も、自、他、体、用、の、み  
お、一、は、此、と、う、く、每、へ、ま、あ、ら、六、處、く、自、得、も、ま、ま、ま、持、又  
初、學、ら、う、と、此、多、言、ハ、附、合、ま、ら、の、ま、形、ら、一、句、の、ま、か、て、た、ハ  
連、歌、も、も、婦、み、ま、て、と、く、く、く、白、の、自、在、あ、ら、ん、ま、ま、む  
好、と、も、是、を、附、ん、と、あ、ま、ひ、て、も、も、作、詞、ふ、ハ、さ、ね、ハ、終、係、し  
我、等、く、奉、を、あ、る、ふ、は、い、の、公、係、ふ、お、せ、信、く、自、力、法、ま、て  
よ、う、と、法、を、學、び、に、む、く、を、晋、子、う、指、合、く、と、と、な、れ、ん、ら、り

白者といふ好むといふ作を飾らむせむはたはし本朝ら  
けつをいへんやんか不法は妨とせよ又道の障り  
んは家小四道の附方小あて古人の白きや一侍小白き  
侍付合とほと熟吟りて其を傳を味いあへ

添附

自家めうとそも町人乃風俗

再信をいふわをいふあうて一守

梅翁

母家めうとそも町人乃風俗

七

天物のまらる。山路くらり

水まらるるをくも。月の輪小

梅盛

前の燈籠とついでこゝとて月の輪小を舞のまは

らとあれ申け八山流道てかへる月ありな但

天物小従て水まらるる附れと月の輪と寄せられ

添附あり

風琴をさういてとらふ大和川

次なる武者の案を尋められ

次角

前八帝吉形く迂らせり附八宿軍の士

幸多末才小聖運傾をせふ不替乃母の六へ  
ゆ末もありの果来ちと回くんとあや後人の  
あつらひもあつらひなむ

土替ふり侍るの給者

きりりりり 膝ふまき侍親あら 夫考

前馬の給言こりあひいといさ申き膝とよて  
附はさきに並ふつりりあのも目やこりあはさふ  
つけて糸公徳姫とあひやあひ

ま清のまは蠟燭乃もとがし

大

広めを人をも追て出る月

春留室

前の蟻の瓜盗人捕へんともふたつひとあへく  
心せおらら島の方小月さ昇つては城を追を  
しと侍り

水筋をまけてこつらぬ意の道

和  
左簾

まふ物もあふ事あひ  
前ハ水筋小ふとて又見とる人あれと迷つ意の道  
小水筋寄くからさるあ附ハさ意とさ候の中と  
見て又傍の人附かひいさるあと申るめし

洞もろはハ老のくらしこと

虫于乃日小息あて世し古明筆

蒼狐

昔老うらうらと度海ハ先君の下されの忍杯を許して  
懐旧の体も免て甘折うら古明筆の訪事をもふ  
愈昔をむもいさも小相傳うならんを附うり

從附

意まろふ道ハ思やう海やう

下すさくねとまらうてやふ指

梅翁

一す先ハ言の秋とらう遠をまのてあふ考あ意乃

夫

雲の影ハくらふ遠あうら指切一と附ふ也

今ハ只起うれもせぬ意痛ふ

死ぬしとらうとあふりし

昌意

昔ハ意小返覺きて花も上らざる夢附ハとも  
係をひぬまなうらハこうれ死ぬとらうまを二月の  
てあふりしとらうては附合人はてからそら  
よりも昔の心小飲かういころれ

飲てころも心一茶ハあふかな

流うまて流ふうけうらなえ

女角

前と夜日酒ほの持麻の俵と見て破さめのをこら  
らんまを思ひ稚小物け(逆)と目さあて公附(母)や  
暁の爰小引燈の火をとふかー

さういふちうらわい子てあら 夫考

前(思)ゆきまや月らん道(打)と(ま)まを  
起出ふる小稚子もやも小月(母)を(母)まもて  
はよぬいふも借ーき作也

海川(一)木小うき各とらま  
腰(け)て品(く)もは(ま)らぬ(階)子也 凉免

干

附(二)夜の蚊(ア)他(小)も(れ)て(憂)存(る)そ(ん)な(ら)ん  
よ(う)な(ら)ぬ(階)子(小)腰(お)け(背)ら(く)指(て)る(考)へ(る)  
な(し)ま(ら)ぬ(物)を(ん)

今の(る)ハ(雪)も(あ)け(け)降(け)ま(と)  
情(く)そ(牛)を(あ)く(て)も(は)し 梅路

前(ハ)今(降)お(せ)ー(き)や(附)ハ(を)積(ら)ぬ(内)ふ(と)  
半(個)報(お)を(ま)ま(情)む(ハ)何(ら)ね(と)公(せ)け(ハ)也  
我(ら)ら(ら)ら(他)も(申)の(ー)き  
通(夜)明(て)ぬ(し)を(尋)め(る)香(包)こ 蒼狐

け附合初濃霧りて事やあらん事色あせ一人の  
やさしく又女形も也しく尋ねてぬ小後し  
新小事も徳元合入る事也

離附

許の事も用いし世しき世小出ぬ

坂の井も坂ぬきのあり

徳元

前今け清世のありしは行の上も大なる事  
用いらる。此附の人情を記して坂の井  
しく坂得る事かき世は神の井も坂ぬきと

近なるは信國在也

是さく見えや二十八日

此のけきハ殊小軍の大事も

桃青

前ハ十八日の雲夜別我は是何事も附へきを夜  
付と見通て付るハ前小拍をくら返して二句の回趣有  
下京ハ守治の蘭船と一ききて

坊との名もさ兼ハおのりき

其角

前け治とる事也登まもや附ハ女事なく使船乃  
信と附るれ事を放れて附小句小詠化るといふむ

逆附

菴(法)と云々嘆(る)ハ定家(う)つらめ

西行(さ)くらうらうら(う)ら(う)ら(う)ら

守武

定家(う)ハ菴(法)家(也)依(て)菴(法)曼(を)定家(う)つら(と)せ(れ)附(ハ)

定家(う)西(り)菴(法)様(と)對(し)て嘆(る)うら(う)ら(う)ら(と)逆(附)之

南(無)阿(彌)陀(く)くと(と)て(黄)れ(と)も

旨如

前(ハ)改(宗)せ(と)れ(又)佛(供)小(林)各(を)と(む)と(も)附(ハ)

念佛(を)間(と)身(中)も(次)題目(一)宗(門)の(公)小(逆)附(り)

三

寝(ひ)乃(夜)中(も)腹(を)上(戸)

家具(の)音(幾)少(く)如(く)響(く)也

若(蒼)狐

前(腹)上(戸)乃(は)寝(ひ)小(枕)也(と)言(ふ)逆(小)附(也)

枕(も)又(如)其(六)家(門)九(斤)有(る)音(の)響(く)と(も)て(身)中(に)佛(を)

念(ふ)乃(如)き(に)振(立)小(答)也(と)言(ふ)逆(小)附(也)

右(上)卷(の)終(句)下(卷)乃(附)句(も)門(ノ)初(学)小(念)也(と)言(ふ)と

思(ふ)を(撰)ぐ(に)依(り)小(白)解(を)法(を)依(り)重(く)人(只)法(を)

賞(ま)と(句)と(も)使(せ)る(に)上(行)ら(う)小(せん)と(も)ら(は)と(も)く

来(り)り(同)く



訖譜流風年

今世訖譜流風よりしむ女始の某物の宗鑑はたゞ訖譜  
守武小定まほしむ女後見徳小至て大ふらけ海内駐この  
為のつ小好い(たさう)の八重頼註連歌よらやて流風  
己くつ仙を立又當流の祖宗因註連歌よらやて流風  
を二譜せ小紙丹板もふまふ小荷盤註法林の風調ふらけ  
ゆふらけ梅好老存高政私風多風我と私をよらけ  
やゆもの二句小訖譜の口と因て世連歌ふ好い流風西雀  
夫らやカ盤と信てやらけと六流と世の時流風むく小

別とらや系とけの始えはらけつとや流の二流あへし  
又始め小ふく都念入流名の附りき都八いけ捨法登白  
とらけ道ふらけと流風の祖考女に田舎ともゆゆ道ふ  
志まを我つふ入一ぬ自窓にしはをまをて印ゆ一そ  
其書と後但他のやまに抄まら初書の者訖譜八折書より  
始まるともい伏せぬや女解風も今も流風をま書  
他と風調とよりあらまに流風ふけと都八万流法流其書  
流風も一ふらけと大都會の事流偏固なら流風一と夫  
とらけ念し書流風も相互の句入其書より入も昔子の

之は(粟ふ)祖傳の旨をばりぬふ重てそみの成りて  
西行 秋ハ六の法師をかくのクアハル 宗因  
定家 毎りの骨をての程は夕毎に 嵐雪  
寂蓮 和歌乃骨をて山乃申への乳 女角  
又其後符をかくせり阿の能成ふ

里人のいふことをいへは親 宗因

又上巻にも(法)かく晋子の能成其に宗因まつりむも仇  
かゝる(法)に賞一とては其奥に

まづら(法)なるもふりたる置る 宗因

観念乃上ふりしとくいと嘆羨せり又衣未抄に先師能成也  
常小曰宗因ふくは我く誂借今以真徳の使を証するに  
宗因ハけ道中具同山也其を各福をぬと賞を中ふ考  
獨り祭禮ふ小極者古池の蛙乃自ら兵備を述て真徳貞室  
能成の海をぬもけ上ふかゝるは上の人と信の中もいりねと  
極青と吾の使の信せよむる各人一人くを奉てまらるるハ  
信じてせむるもふふも其のふ女氣を下ぬもぬいりて  
親士あるふ許ハ師の能成二人小信をば極證をぬむと云限  
のあゝかゝ極青の道と書く弘世ハま考(法)候者さる

いかに入らざるに自らの新創を以て他を以て初まらねども、  
河津の思ひ申せし難きや、  
獅子の舞は小段の深甚の中は、  
其角伝の好他、  
初学のより種なかり、  
次で小判、  
お来て一は家とあとも、  
つげ那を待らぬ執の意、  
誹諧より種 下巻終

生

種附録下

添附

いづも亦あつた女あつた女

近江の湖あり一夜換授

家福のあつた踊りの師匠

あつた踊りのあつた踊りの師匠

いづも亦あつた女あつた女

棒おあつた女あつた女

冬央

如水

文栄

家の先組も利休らり

石灯籠自慢やふい思たまふ

暮らゆしきまのまうら

今もあふくはく教ふ記さきて

國語小書花の地も又あま

あふきあふあふあふあふ

はるあふあふあふあふ

あふあふのあふあふあふ

日乃あふあふあふあふ

龜龍

涼山

蒼洲

玄玉

乙

俄あふあふの家あふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふ

沂水

美翠

其葉

仙鳧

仙禽

高野の山内小山乃ら

一 野

一人森のこ人松家子に戸地し

まらしくも信城乃天井

近人のし月信いしきうらき

きくまふきの禍ふ教の火

、

くくらりてまたしらく廣

中置乃よけ小橋そくま

一 野

祇 寛

左 藤

田 旦  
三

妻かきこ又い高乃連うま

程の夫婦大さうま好

は和師て人の知りては傳者

道夢情土とら浦堂の踏ふら

系小張道乃皆形回通

見こやう小地の心とやを産物全

まて秘ちてははり残堂

七兵衛とら小奴もあら上総部屋

八世まつこの利益行く倍

大 美 樹

青 芽

寛 之

百 我

侍て揺れとるまゝにけふ放さるる

奇峰

定玉の通るまゝに歸む明の光

九十ととりのと暗をせぬ業

可笑

古来稀しやふまをハソふて

七の組とくくといふ

社時雨

仇めきの清海まゝに他宗より

娘ふゆて母もやめらま

煮北

冬ハ蘭乃香風居ハ榎の香

太く乃馳まゝ人ゝ思ふ先ッけ

泉外

乃はり岸へ旭やんのま

さしぬハ船の眼を申す起

素軒

おろろくく早居とまき西ツの侍

蓮のくく寺の胡飯

雨簾

赤もあつらふと陽さうも花

西馬堂小菓子うゝ幕の我もも

都奴雅

小ころくく笑める顔の香風

か雲くく皆のぬくもち常

遙瀨

男世帯のいゝく采花日

廢之の胎目てハ氣と決めお泰

嬰周

まスリ多涼かてらふ小三箇と

春朝

玉ころあて身も纏きく御

妻の心あねはよら山のおきまの

逸外

茶ハ山ふきふふハ玉川

何事も戻を結くぬ十九世

素久

母と遊ふ起る拜置

雨戸明きハ初戸降く急

金馬

新ら〜〜ち流の持〜夫び

白

永き多日を世泰の争い

汲垂の茶く組付の蝶〜〜

可忍

もらほしもも茶〜〜あまきあ

のひて静〜〜あら〜〜あ

五蝶

花さく梅ハ文質ハ樹〜〜と

人からり君子宥の程い

分香

のま列を〜〜〜書く〜〜

曾あ〜〜ハ飛風のぬふ何と

仙里

人あも茶の〜〜〜ら〜〜

侍の町々たりきふに妻も惚まき

賀重女

蓮はくると毎天白く夫の傍

嫁みゆらりと又あはしてさるる

沾發

花もせらりく上邸日くは

親不床も侍の歩りやう

去藤

五摺を松のまゝ風むらから

祓る町く夕くらら乃後

操舟

花よりきらふ秋や知らぬ世

若草もくくく盛久まゝかきて

昌舟

ほろゆきをさらしきようそえむ

具足師ハハの事やちヤの御代春

雙柳

掃除更しくまも静をさ

蕭乃の志小位を附書院

松賀

商賣の高賣くく小客も客

信翁の十巻く時もののかは

素克

孝乃徳人の知事地知り天小如き

勅はもたのりる出は老るの秋

秋策

物わくく小望の老人



おきしうらひきこ一日は終ら

桂炎

あかしのまをさきさき入る

宵八目ふくくあひ提灯

洞水

あけきりともも伸るる上

あけきりともも伸るる上

調布

あけきりともも伸るる上

あけきりともも伸るる上

扇朝

あけきりともも伸るる上

あけきりともも伸るる上

煮外

あけきりともも伸るる上

云

あけきりともも伸るる上

あけきりともも伸るる上

白英

あけきりともも伸るる上

あけきりともも伸るる上

規外

從附

あけきりともも伸るる上

あけきりともも伸るる上

錦車

あけきりともも伸るる上

寄書ありへの着る極て於

錦衣女

そは乃留ちふ夜寝極て

新ららぬとも夜寝を親

冠車女

員てあるの心ハ根

相つてあることと神も

升來

庭造らふはまてうら物うは人も

漸佳境 大津八町

煮磨

再訪のあまらうも若やまて

入歯の頬の敷もの

煮袂

三

新白も只登りくる大軍

身くらうる身よあうも今

置水

大せは後とたりふれは

あやしの少寝うらと初灯籠

舟子

強しくくくると皆のよしの旅

そらそそうも思ふぬ大井川

煮固

きくらにたか一年始の寺まて

うらつて地味よよはらあう

煮梁

初鹿川に宿せし意中も

通夜かのくしと影を足合を

上やを一人の道くかたて体

花をゆらめふゆを静見

七親を夏と早朝

母親ふゆを不恙を女形

何れをさるるあつ乃秋の待

まじふふこゆの影を乃重所

むし明あきなふ記をつけ

壺天

亀流

得和

舊朝

ス

嫁の如き母乃たぬき志

新の色は思ふ日の中

夜をあしりてるは秘花

明のぬる初もゆのくし山又

風はゆりぬふ合を思ふ

と兼はうゆせいの羽織行は

化されやうふ跡まの狐病

てゆきくはまむ縁を押し

被のさあはし律をさる

観魚

言外

意外

文足

虎六

薄倉のよいの大山おつてく

惜しき鞋も人とりそくふ

若葉をふし古ひてもふち地うち地

暮ふはらけしよ青丹より一まら

ふしとつや日くこの旅も程お

小町とちりきき事ハ雨性

旅ふ氣たつても果実まらこもち

あらもよ能とよせぬ物色

まじりつ留さの勢もま境せふいて

史山

舊香

妻伎

夷逸

元

娘とやうし捜さよふや

あふれこころを還りまらま

女房の鬼も其王の佛より

思ひまゝくさくらを野辺の夕雲

旅もあらも疾くはたこま

おらねも只や信ふふたの衣

ついでの家うらね女まらく

雅俗こころは一人情

道者もも言評の意を是に

藩山

右外

五外

花慶

素心

温泉の旅なるや保養道く

早し女ハあまきしほを流の戸より見

ふしらすけの山寺乃見

晩後の鞠よりらりし懐ちほ

あふ人ちうらまはぬは文

せけハおとろの茶のよきお

人乃しあまきしほを流の戸より見

伏見の舟花あまきしほを流の戸より見

あまきしほを流の戸より見

春瓜

東水

鳥朝

花丸

子

津鏡のむらハおとろの茶のよきお

曠の場所みくおとろの茶のよきお

一さししおとろの茶のよきお

あまきしほを流の戸より見

悟りおとろの茶のよきお

賑々ハおとろの茶のよきお

江戸中の夜を根津のま祭

和洋の故事おとろの茶のよきお

腹乃書と帝魚のうらまはぬは文

五計

在泉

英富

社来

書心

糊うしきどこのきも名を名の果る尊  
甘身世ふふ紅緒の目拭い

左藤

離附

田園しりそ後の異状

子いつれまうして居る系車

雀嫁女

一人の抱きしめて出さず

夕日くや樹小籠の生かほま

呉龍

墨菊のさくもあはれ

あらしを後乃難とるま

霞水

他岸の形も妻ふゆ

琴安

うし船酔い角力ふま

権系何まハ族父あ

玉英

早徳井の底ハ吊らぬさ

習うてまをさるる

煮蓬

ふらふらと女小昔の

ちる時ハ登の居子も泥の中

素直の實事實しゆのそ

たひ

嫌ひなるもほを組の好

虫かしの甘日一面を扇無

可克

今おもしろい事のと古人乃自

ほつ積買ふはくへおる倍

厚雅

涼もふ何らぬ人もあま

るの昔ハ客人のねりの反加減

斗眞

何やら扱々癖積り者

紙繰し経く<sup>ヒキ</sup>ゆきと摺夜一と書

松十

王

酔ハ腹ッホーかき居侍

若りの理火繪のちもまのり

煮外

何積まうぬ出家侍

落流のたまら祈るくをせま

李の

家さうあまの縁毛乃後

落やう何れも久日小かやたて

壺外

逆附

酒小がしてハ並ふもの味し

孫志小助をもちし年乃良

龜幸

神志いあひまきうなる柳腰

あらの杉をま通をま地

文賀

漏けまを地を接く頃

遠刹の鬼々懐まむぬけま

志徳

廓乃友のあとも平ら

物入階はらの儒者の妻

志隣

物末もあらうものま

志

睡まをりえ上は胸乃大

竹林

六町あてもも子里ハ走らぬ

好事もつをま孝行

志行

たうの舟のふねまくと志喜者

曲らぬと氣貨棒のせんせ

甫外

大根おらして餅乃くひら

又酔てまこやら志太四つるふ

従一

豆腐もきれー雨乃今

江戸中一の鯉く徳日子疾

意協



まくののこつまらもあつ後無

鼻十分小大系乃伸

廉富

春了とく思を吹世も好事を

らるの外ハ存せぬこの武士

素粒

夜梅と朝はららとのむよと

父母在まきくそ好ひ苦限

義粒

何となく誓花の地さく秋れ書

浦乃の苦念も月見小酒

素外

真之表八章

又人にも内をやまの神は来

何となくやえ乃松かまむ朝

素外

旅と自花ハ雨を中世ハかなを

今とくねと冬朝もむら絶を

新宅のあねは清くはたのし

いゆく晴月通了雨をら

元とくそちをらけくおをねは母

好侍むしの妻のろ儀やの

守武

添

侍

離

添

、

離

、

、

行々去六章

宗鑑

遠附

かほをよみ六雨ふもかよ初半世月  
吹くら風小くくると来る雁

表外

離

あくる秋松とま陰ふ空をよ

添

めくくくくくくくくくくく

従

昔切の神涼やうふてあされ

離

まくくくくくくくくくくく

草同八章

梅道

まくくくくくくくくくくく

五

蒸

かほくくくくくくくくく

表外

離

川風ふ夕日るをや晒すらん

添

白くくくくくくくくくく

離

盆をよみふくくくくくく

添

あハ陽氣の高くくくく

離

初きくくくくくくくくく

従

まくくくくくくくくくく

附録下巻終

四時の景物二巻の太録は遠く先人の著述有て用となす小  
 多と空句又附會乃ら白き心火年々好まらざる某冊緒  
 家の文車小も盈めくされと初学道小入便ともふさむ書  
 稀なるべきを已む常小女撰何らゆやく老師の山小とよそ  
 ろへひ某ふやそやひのまふ小校書と命せらば小ふひ星を敷  
 續きたる平話ふて詳らうたる年誠小純道の規則會此  
 らり種あらんと一島井遥瀬雀躍しそ女亭小謹書

文化四年丁卯季夏

東嶺山館 花屋 次郎

誹諧鑑 芙蓉山人雪成撰 中本一冊  
 此書ハ明和中心編出版當 又ハ二編  
 ねふ江戶判者高京書たの句と拵た也

誹諧礎 釣月堂一漢撰 小本二冊  
 發句枕書多引の喜かり四季懸忘社  
 叙し要用の詞と五七五まをそと身取白處

誹諧綾錦 菊岡雀下庵沾涼編 全部三冊  
 往古より連哥降の系譜俳諧流の傳説  
 と系て流義と志しむ其人乃編集と附と

誹諧持扇 季寄使用 懷中本薄葉摺一冊  
 此類書世多々といふ校筆にそて流語と  
 弄ふ人懷中へ候利と筆とる小かなり

誹諧増補三國人名牒 高井先生撰 中本一冊  
 日本唐天竺母依奉と歌人雅俗といふに  
 其業を傳とあふて此利附句の候と

誹諧季引席用集 撰者同上 横本二冊  
 此書四季氣物名所因令け歌木のよと  
 訂しんはふあといふと短歌と人まを

誹字席用集 撰者同上 薄葉寸珍本  
 大の書以度並 狭中へ候と小かなり  
 此類書空室傳人古今歌を流語持筆



誹諧增續山の井 北村季吟翁撰 小本二冊

誹諧增補所名集 槐陽井躬之著 小本二冊

誹諧季寄屏風 古泉庵存義撰 高井先生校

誹諧手引種 一陽井素外著 中本二冊

誹諧月雪花 撰者同上 二冊

誹諧通言 並小舎五瓶著 小本一冊

誹諧玉池雜藻 一陽井素外編 中本二冊

誹諧遊覽誌 羅扇宇葛郭著

空翠集 對山編 雪中庵完來 全二冊 送吟と拾ひて 上柳と

誹句探六帖 雪中庵完來撰 中本二冊

雪門發句帖 一流判者四季發句 一冊

雪阿嘉理 雪門一流高島印譜 並發句附合 一冊

龜戸發句拔萃 律雪庵評 一冊

芭蕉翁渡唐像 石摺一枚

芭蕉翁甲子紀行 真蹟 一冊

拾遺翁の遺稿を考ふるにのむ書に注

と年性儀乃の遺稿を考ふるにのむ書に注

和歌の流るるに因りてのむ書に注

存義老人の遺稿を考ふるにのむ書に注

玉池老人の遺稿を考ふるにのむ書に注

春霞秋の乃の遺稿を考ふるにのむ書に注

戯場の他老女流の遺稿を考ふるにのむ書に注

業の外他老女流の遺稿を考ふるにのむ書に注

録 五條天神寺 花屋菫次郎

月並 雪中庵完來評 一冊

月並 五句合 律雪庵評 一冊

繪入句艸帑 同撰 折本 一冊 彩色摺

律雪 連座發句拔萃 初編ヨリ五ニ 各一冊

芭蕉翁鹿島紀行 真蹟 一冊

蕉翁交 柳居句選 三大集十云 中本一冊

雪門判者發句帖 一冊

增山井補註 雪萬撰 先後よりしるす 全一冊 事物考後と等

柿晋問答 其角去來俳論 一冊

誹諧櫻合片一歌仙 存義一例 獨吟一冊

誹諧四季發句帳 前後二編 一冊

誹諧猿菟玖波集 小本前二冊 後一冊

梅翁宗因發句集 耕齋津富撰 一冊

誹諧天狗話 一陽平素外編 一冊

其角附合句續松 其角撰 雨面撰 一冊

古來庵存義句集 圖大撰 四冊

誹諧二冊子 四世合歡堂沾山撰 發句附合二冊

誹諧發句評林 未刻

眠柳居士發句集 抱山守門琴撰 二冊

誹諧麓之杖 年來俳宗没古年表 水戸素綾撰 一冊

江戸誹匠家雅見種 江戸点者居定符 小本一冊

流行不易と云ふ時代變伴ありてその秀 ぶ致致多かるひと冊を今他種より好むる

宗鑑大筑波外野と撰とて謝とて自ら了 付合とて接奉とてよく他種とて曉とて

椎本才磨發句集 後幸堂 宝馬撰 冊

活坊舊實生變里物が産實捨逸志道 利者本意を祈撰の傍有公筆 野乃辨也 與りて得宋の文と取る書接する是の集

室普奇の首巡是のいゝとて慕流乃 其角先少附合其秀を公撰とて後を以

誹諧百福壽 木樺庵樓川年賀 三冊

誹諧千里獨步 蕉風傳書 水戸素綾著 一冊

太無發句集 上秋山より 門人霜後撰 二冊

山東遊覽誌

小本二冊

山東遊覽圖會

北尾紅翠齋画  
近刻

向島遊覽二画景硯の水

浅草庵大入社中  
和紙と加へ近刻

再板 日ぐし八景圖繪

北尾紅翠齋摸  
ふりし摺一枚

此書八江の道 一倉金沢の支路と微細な  
ちりちりをしたる 一は土間乃縁起の存存と附

存の書と云々 画と云々 文譚と添ゆ  
追加熱海塔の澤温泉場の体と出す

大川橋より上へ本母寺まで水陸乃景  
色とありけり小図一遠境の雅名と貽む

蜀山人先生の狂紙詩歌一帙と副  
景地の外遠望の風姿と云々と云々

前句

誹風柳樽小本二冊

浅草新堀判者川柳考は書初編を以て當時まで六十七編及ぶ  
都鄙の流行と云々 年々  
世人の談笑と云々 卑雅俗

高點

誹風柳樽小本二冊

浅草新堀判者川柳考は書初編を以て當時まで六十七編及ぶ

